

月刊 FALCOM MAGAZINE

Vol.152

リースが華麗な新衣装を披露！

『英雄伝説 暁の軌跡』

ファルコムニュース

英雄伝説 空の軌跡

リベール王国スナップショット

忍たちによる血を血で洗う戦いが勃発!?

勝負の行方は果たして……？

も～っと集まれ！ ファルコム学園

ついに発売！　クリア後のお楽しみ

「タイムアタック」＆「ボスラッシュ」！

冒険がより楽しく快適になるDLC情報もチェック！

『イースX -NORDICS-』



FALCOM MAGAZINE CONTENTS



冒険の海に出かけよう！

『イースX -ノーディクス-』がついに発売！

イースX - ノーディクス -

- ◆好評発売中
- ◆ジャンル：アクションRPG
- ◆対応機種：Nintendo Switch、PlayStation5、PlayStation4
- ◆プレイ人数：1人
- ◆CEROレーティング：C
- ◆価格：[通常版] 7,800円（税抜）
  〔《アドル・クリスティン》Edition〕11,000円（税抜）
  〔ダウンロード版〕7,500円（税抜）

「イース」シリーズ生誕35周年記念作にして、ナンバリング最新作となる『イースX』。ついに発売となった今回は、シリーズおなじみの「タイムアタック」や「ボスラッシュ」の情報が到着！　そして、冒険がより楽しくなるDLC情報も明らかとなった！

本編クリア後のお楽しみ！

「タイムアタック」＆「ボスラッシュ」でアクションを満喫しよう！

『イース』シリーズではおなじみとなっている「タイムアタック」＆「ボスラッシュ」は今作でももちろん登場。本編ストーリーをクリアするとタイトル画面から選べるようになっており、装備やアクセサリー、マナシードなどをセッティングして、強力なボスに挑んでいく。さらに今回は「ボスラッシュ」で対峙する強力なボスたちの情報も到着した！






《剛腕の不死獣》アムドバイツァー



オベリア湾で姿を現した獰猛な獣型のグリーガー。
巨大な顎と発達した前腕、ムチのようにしなる尾を使って狂ったように獲物を攻撃してくる。
固い装甲で覆われた前腕部は防御力が高いため、正面からの真っ向勝負には要注意。

《暴虐なる剛躯》イジ



ヨルズの配下としてアドルたちを執拗に追いかけてくる巨人型のグリーガー。
ヨルズたちのような知性は持ち合わせていないようだが、その分、爆発的なパワーを秘めており力任せに広範囲の攻撃をくり出してくる。
体力もケタ違いに多く、マナ使いのアドル＆カージャであっても倒すのは困難。

《底無しの暴食蟲》マグナディーガ



オベリア湾の一部地域に棲息している、固い甲殻で全身を覆った巨大生物。
周辺に散らばった瓦礫、木材などあらゆるゴミを飲み込み攻撃手段としても用いるほか、巨体を活かした押し潰し、薙ぎ払い攻撃で相手に致命傷を与える。
すり鉢状の地形での戦闘を強いられるため、マナライドを使った戦いがカギとなる。

《腹黒き妖鳥》オルキュペテー



霧の中から人々に襲い掛かってくる怪鳥型のグリーガー。
女性のような叫び声は聴く者に混乱をもたらし、歌は相手に呪いをもたらすという。
3体で連携しながら上空からの高速攻撃をくり出してくるため、ソロモードの自動回避、コンビモードのガードを切り換えつつ戦っていく必要がある。

《狡猾なる刺胞獣》ブロブ・ジュリオン



クラゲのような姿をした寄生型グリーガー。
毒や麻痺攻撃を駆使して獲物を弱らせつつ、相手を確実に仕留めようとする。
動き自体はそれ程機敏ではないものの、無数の小型グリーガーに分裂して相手を攪乱することがあるため行動パターンを読み切ることが難しい。

「奪還戦」の海上戦をサポートしてくれる
頼もしい船員たちの「奪還戦スキル」をチェック!

サンドラス号による海上戦の前半と、島に上陸してアドル＆カージャで戦う陸上戦の後半で構成される「奪還戦」。今回は、その前半戦で活躍してくれる船員たちのスキル情報も到着した。中にはストーリーの展開にあわせてスキルが強化される人物もいるので、詳しくチェックしていこう。

ドギ【艦隊壊し】 敵全体にブレイクダメージを与える

フギル【奮起のいななき】 戦闘中のテンションレベルが 1 段階上昇する

フェリア【双璧の鼓舞】 30 秒間、サンドラス号の被ダメージが大幅に減少する

エゼル【滅私奉公】 40 秒間、EX 兵装の威力が上昇する

フレア【医師の癒め手】 40 秒間、敵船全体の防御力が下がるほか、耐久値も減少する

モミナ【物資補給】 30 秒間、EX 兵装の回復速度が上昇する（重ね掛け可能）

ジョエル【応急手当】 40 秒間、サンドラス号の HP が徐々に回復する（重ね掛け可能）

ロメス【在庫解放】 30 秒間、特殊弾を撃っても弾数が減らなくなる

アシュレー【こっちくんな！】 10 秒間、敵船全体の機動力がダウンする（重ね掛け可能）

ガリバー【自警団の魂】 30 秒間、ブレイクダメージが上昇する（重ね掛け可能）

サシュ【灯台守の矜持】 40 秒間、バリアピラーの防御力が低下する

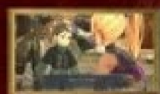
ミレット【冷たい眼差し】 40 秒間、敵船全体の攻撃力が減少する

手枷のマンディ【罪の呪縛】 30 秒間、敵船全体の機動力が低下する（重ね掛け可能）

ギーラ【凶運招来】 敵船の HP を 1 にしてしまう（1～6 隻）



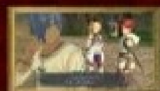
【ガリバー】カルナックの治安維持を担う自警団の団長。バルタ水軍との板挟みになりながらも懸命に街を守ろうとしている。



【サシュ】オベリア湾の大灯台で働く灯台守の娘。なにごとにも好奇心旺盛な少女で、物怖じしない芯の強さも持っている。



【ミレット】偶然カルナックの街を訪れていた見目麗しい女性。その言動や立ち居振る舞いからは、どこか気品を感じさせる。



【手枷のマンディ】手枷と足枷を付けた痩せぎすの男。どこかから脱獄してきた囚人のようだが、その素性は謎に包まれている。



【ギーラ】全身を黒い布で覆っている謎めいた占い師。何事にも動じず、達観している。彼女の占いは常に的確で外れたことがないとも言われている。

無料の便利アイテムもあるので要チェック!
『イースX』DLCカタログ＆カレンダー

※掲載している DLC アイテムは配信される DLC の一部となります

9月28日配信

《シールドセット》220円

デザインの異なる３種類のシールドセット。
装飾品として、アドル＆カージャの背中に装着させることができます。



- クレリアシールド×2
- ワタリガラスの盾×2
- バルタ水軍の盾×2

《無料お試しセットA》無料

強化素材「マナシード」と瓶薬のセット。
瓶薬は使用後に空き瓶が残るため、持ち運び可能な回復薬の数を増やすことができます。

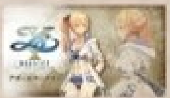


- ヒールポーション×1
- マナシード「剣の印（勇猛 Lv1）」×1

10月5日配信予定

《アズール・マーメイド》330円

カージャの服装を、蒼き人魚をモチーフとした爽やかな水着衣装に変更することができます。



- アズール・マーメイド×1

《ピッカード号セット》330円

帆船サンドラス号を「ピッカード号」に装飾することができます。



- ピッカード号の帆×1
- ピッカード号の船体×1
- ピッカード号の装飾×1
- ピッカード号の砲台×1

《無料お試しセットB》無料

強化素材「マナシード」と冒険弁当のセット。
弁当は使用後に弁当箱が残るため、持ち運び可能な冒険弁当の数を増やすことができます。



- 開運ポテトパイ弁当×1
- マナシード「盾の星（堅固 Lv1）」×1

10月12日配信予定

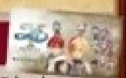
《聖獣ルーなりきりセット》275円



"聖獣ルー"になりきれる、アタッチアイテムのセットです。

- アド・ルーの耳×2
- アド・ルーのしっぽ×2
- カルージャの耳×2
- カルージャのしっぽ×2

《ちょこスタセット》220円



デザインの異なる９種類のアクリルスタンド風アクセサリのセット。
装飾品として、アドル＆カージャの頭に乗せることができます。

- ちょこスタ・アドル×2
- ちょこスタ・カージャ×2
- ちょこスタ・グレン×2
- ちょこスタ・ローザ×2
- ちょこスタ・フギル＆ピッカード×2
- ちょこスタ・クルス×2
- ちょこスタ・ミラベル×2
- ちょこスタ・レイフ×2
- ちょこスタ・ドギ×2

《ノスフリート艦セット》330円



帆船サンドラス号を、グリーガーたちが操る敵船「ノスフリート艦」風に装飾することができます。

- ノスフリート艦の帆×1
- ノスフリート艦の船体×1
- ノスフリート艦の装飾×1
- ノスフリート艦の外輪×1

10月19日配信予定

《エンドレス・ボヤージュ》220円

アドルの服装を、果て無き探求心みなぎる海洋冒険家の衣装に変更することができます。



- エンドレス・ボヤージュ×2

《マフラーセット》220円

デザインの異なる３種類のマフラーセット。装飾品として、アドル＆カージャに装着させることができます。



- マナ使いのマフラー・炎×2
- マナ使いのマフラー・氷×2
- 不死者のマフラー×2


FB ファルコムBOOKS
これを読むまで
しぬでないぞ!!
『月刊 Falcom magazine』に掲載された読み切りコミック 13 本を完全収録したコミックアンソロジーがついに登場！　新旧ファンも納得のラインナップで贈る、ファルコム愛溢れる1冊を是非ご堪能あれ！
カバーは『英雄伝説空の軌跡』コミカライズを担当した啄木鳥しんき先生の豪華描き下ろし♪
好評発売中!!
ふぁるこむコミックざんまい
収録テーマ作品
『イース』
『ブランディッシュ』
『ヴァンテージマスター』
『くるみん』
『ザナドゥネクスト』
『軌跡シリーズ』
価格：本体920円+税
ISBN 978-4-89610-818-7
©Nihon Falcom Corp. All right reserved.


リベール王国に姿を現した、
結社《身喰らう蛇》の牙・執行者たち。
その動きと示し合わせたかのような
エレボニア帝国の不穏な行動に王国は揺れる。
そして物語は、古代ゼムリア文明の精華・
リベル＝アークへと飛翔する！
リベール王国次期女王たるわたくしの名に賭けて！
英雄伝説 空の軌跡SC
～絆の在り処～⑥
啄木鳥しんき
定価：1000円（本体909円+税）　ISBN 978-4-8021-3294-7
発行：フィールドワイ　発売：メディアパル
©Nihon Falcom Corp. All rights reserved.
©Kitsutsuki Shinki
©FIELD-Y
◉フィールドワイ公式HPはこちら➡ www.field-y.co.jp
◉ファルコムブックス公式HPはこちら➡ www.field-y.co.jp/falcombooks

★闇に生きるが忍びの定め★



忍び修行初級編



めくるめく分身



忍の字



長年の成果



従者の条件



やべーヤツ参上



噂の手練れ



くさりがま



従者おかわり



弱点を克服せしもの



休息する忍者



得体の知れない醜悪なアレ



ジンコちゃん



忍びきった勝利者





英雄伝説 創の軌跡
THE MISERABLE SINNERS 01
漫画：墨天業
《仮面の隠者》《暗殺者》《自律人形》
それぞれの思惑を胸に
運命と真実に迫る物語
定価:1000円(本体909円+税)
ISBN978-4-8021-3309-8
発行:フィールドワイ 発売:メディアパル
©Nihon Falcom Corporation. All rights reserved.
©BOKUTENGOU ©Field-Y



穏やかで騒がしい生活が戻ってきたファルコム学園。
徐々に英雄、戦士、さらには曲者までが還ってくるなか、
新たに「イースⅨ」のキャラクターも参戦！
まだまだ止まらない異能・新久保だいすけの筆が冴え渡る！
おまたせ！
待望の第2巻だよ！
も〜っと集まれ!
ファルコム学園②
新久保だいすけ
定価：本体 900 円＋税
ISBN 978-4-8021-3213-8
©Nihon Falcom Corp. All rights reserved. ©DAISUKE ARAKUBO ©2020 FIELD-Y
発行：フィールドワイ フィールドワイ公式HPはこちら→ www.field-y.co.jp
発売：メディアパル ファルコムブックス公式HPはこちら→ www.field-y.co.jp/falcombooks

▶ファルコムニュース◀

ファルコムファンに贈る最新ニュースをピックアップ！

総計350名に当たる「イースX -NORDICS-」発売記念WEB抽選会を開催中！

「イースX NORDICS-」の発売を記念して、日本をはじめ世界中どこからでもご応募できるWEB抽選会を開催。クイズ正解者の中から抽選で総計350名様に豪華賞品をプレゼント！





【問題】

ゲーム序盤からの問題です。
カルナックの自警団本部前の浜辺にいる男の子は何を探しているでしょうか？
7文字でお答えください。

■賞品

A賞：出演キャストサイン色紙（計6名様）



カージャ（Lynn）　クルス（広瀬裕也）　レイフ（羽多野渉）



ドギ（三宅健太）　アドル＆ドギ寄せ書きVer.（梶裕貴＆三宅健太）　ヨルズ（高橋知佳）

B賞：アルミボトル／カラビナ付（計10名様）



C賞：オリジナルロゴTシャツ／Lサイズ（計20名様）

D賞：アクリルスタンド／全6種（計314名様）



■応募期間
2023年9月28日（木）～10月31日（火）23:59

■注意事項
・ご応募はおひとりさま1回まで。重複した応募は無効といたします。
・プレゼント当選者には、11月6日（月）頃までに直接メールをお送りします。
・当選メールが受信できるよう「@falcom.co.jp」からのメールの受信設定をお願いいたします。
・景品交換は承れませんのであらかじめご了承ください。
・ゲームアンケートの通常のマンスリープレゼントは、WEB抽選会当選者さま以外からの抽選とさせていただきます。

抽選会ページ
https://www.falcom.co.jp/ysx/special/raffle/

『ADOL CHRISTIN～イース生誕35周年音楽作品～』＆イース35周年記念『豆皿3種』発売決定！

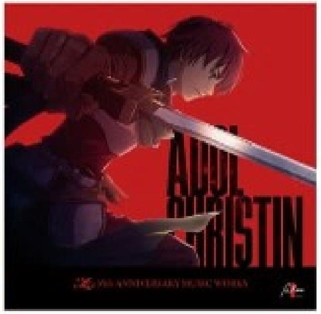
「イース」生誕35周年を迎えたことを記念した、記念碑的音楽アルバム＆「豆皿」3種が発売決定。アドル・クリスティンの旅をコンセプトとした、シリーズ生誕35周年記念作品をどうぞお楽しみください。
また、豆皿3枚をセットにした『豆皿セット　限定シリアルカード入りBOX』は限定1,000セットの販売となります。ぜひ、お早めにご購入ください。

■ADOL CHRISTIN ～イース生誕35周年音楽作品～

《収録曲（全13曲）》
01. THEME OF ADOL ～ FIRST STEP TOWARDS WARS（イースI）
02. TO MAKE THE END OF BATTLE（イースII）
03. イース -失われし古代王国-（イースI&II）
04. セルセタの樹海（イース セルセタの樹海）
05. バレスタイン城（イース フェルガナの誓い）
06. 最後への序曲（イース フェルガナの誓い）
07. FIELD OF GALE（イースV 失われた砂の都ケフィン）
08. イクルシアン・メモリーズ（イース8 -Lacrimosa of DANA-）
09. 翼の民を求めて（イースVI -ナピシュテムの匣-）
10. MIGHTY OBSTACLE（イースVI -ナピシュテムの匣-）
11. CROSSING RAGE（イース SEVEN）
12. CLOACA MAXIMA（イースIX -Monstrum NOX-）
13. ADOL CHRISTIN -The adventure goes on-

■発売日：2023年10月12日（木）
■価格：CD盤…2,800円（税抜）
DL版…2,222円（税抜）／単曲231円（税抜）
ハイレゾ版：2,777円（税抜）／単曲324円（税抜）
※発売日より、定額音楽配信サービスでの楽曲提供も開始

商品ページ　https://falcom.shop/products/detail/567





■豆皿

■発売日：2023年10月12日（木）
■価格：セットBOX／6,050円（税込）
単品／各1,870円（税込）
■豆皿サイズ：直径104mm×高さ16mm
■素材：陶器

商品ページ　https://falcom.shop/products/detail/566

iOS/Android『ドット勇者』×『空の軌跡』10月1日コラボ開始！



Efun Company Limitedが手掛ける新作スマートフォンゲーム「ドット勇者 ～三時のおやつと昼寝付きの冒険～」で、『英雄伝説 空の軌跡』との大型コラボレーションが決定。コラボでは、限定勇者「太陽の娘・エステル」「漆黒の牙・ヨシュア」「殲滅天使・レン」が登場。未知なるエモン大陸での試練、魔族の陰謀など、コラボキャラクターたちの運命に纏わる期間限定のオリジナルストーリーが展開します。

■コラボイベント期間：
2023年10月1日（日）0:00～10月28日（土）23:59

コラボ特設ページ
https://dotyuusha.efun.com/event/collaboration/

「英雄伝説 閃の軌跡」10周年バースデーくじ販売開始！

オンラインくじサービス「くじ引き堂」では、『閃の軌跡』10周年を祝うオンラインくじを販売。新旧《VII組》のメンバーを中心としたここだけのオリジナルグッズをラインナップ！



■賞品ラインナップ
S賞：選べる！『閃の軌跡』バースデープレート（全2種）
A賞：選べる！胸像アクリルスタンド（全10種）
B賞：ミニキャンバスアート（全6種）
C賞：バースデー缶バッジ＆バースデーカード（全18種）
※各賞全種のうちいずれか1つが当たります。

■販売期間：2023年10月31日（火）16:59まで
■販売価格：1回880円（税込）
■発送地域：2024年1月中旬～順次発送
■注意事項：
※発送目安は注文状況や商品によって発送時期が前後する場合があります。
■発売元：株式会社KADOKAWA

販売ページ
https://kujibikido.com/lp/sennokiseki10th/

9月の新／衣装替えキャラクターをチェック！



アズールブレイド・リース

アズールブレイドの意味は"紺碧"と"剣"。その名の通り、華麗な踊り子のような軽やかで紺碧な衣装がリースの美しさをより引き出してくれている。普段はシスターとしての姿が印象深いだけに、ガラッとイメージが変わる新衣装となっている。

『暁の軌跡』極秘資料館

「氷の女王・デュバリィ」衣装デザインラフ
（2022年9月実装）



「アズールブレイド・リース」衣装デザインラフ
（2023年9月実装）



THE LEGEND OF HEROES 暁の軌跡

アカツキノキセキ

毎月魅力的な新キャラクターや衣装替えキャラクターが大注目の『英雄伝説 暁の軌跡』。
９月は夏祭りと釣りをテーマにした期間限定イベントが開催！
さらに、リースが涼しげかつ華麗な衣装替え姿を披露！

『英雄伝説 暁の軌跡』公式ホームページ
http://akatuki.ujj.co.jp/

公式ツイッター
https://twitter.com/akatsuki_ujj

期間限定イベントシナリオ「Blue Air」が実装！

とある真夏の日。仕事を終えたナハトとクロエは浴衣に着替えて
港湾区で開催されているお祭りへと向かう。
屋台に射的……様々な催し物を満喫する２人に"釣り大会開催"のアナウンスが聞こえてきた。
あの《釣皇倶楽部》主催の釣り大会……。いったいどんな戦いが繰り広げられるのか！？









※このイベントは終了しています。

※画像は開発中のものです。※上記のイベントは状況により内容の変更を行う場合があります。


『英雄伝説 閃の軌跡』のアリサたちが魔法少女に!?
脚本家・山下憲一（TV アニメ『みんな集まれ！ファルコム学園』）と漫画家・さがら梨々（コミック『閃の軌跡』）の強力タッグが贈るシナリオブックが登場！ 平穏な日常に突如現れた怪物。その時、アリサのキーホルダーが不思議な光に包まれて……!?
あなたにお届け!
愛と希望の流れ星!
魔法少女
まじかる☆アリサ
決定版
著:山下憲一
イラスト:さがら梨々
原作:日本ファルコム
好評発売中!
判型：A5正寸　ページ数：160　定価：1,300円（税別）　ISBN978-4-8021-3131-5
©Nihon Falcom Corp. All rights reserved. ©KENICHI YAMASHITA,RIRI SAGARA 2018 ©2018 FIELD-Y


英雄伝説
閃の軌跡06
原作／日本ファルコム
脚本／恵村まお　漫画／さがら梨々
A5判　160P　定価:本体991円+税
ISBN 978-4-8021-3123-0
©Nihon Falcom Corporation. All rights reserved.
©SAGARA RIRI 2018
エレボニア帝国に吹き荒れる陰謀の嵐!
時代が選ぶのは果たして誰か!?
そして友という絆に背を向け、
両雄相まみえる!
激動のクライマックス!
好評発売中!!
発行:フィールドワイ　フィールドワイ公式HPはこちら➔www.field-y.co.jp
発売:メディアパル　ファルコムブックス公式HPはこちら➔www.field-y.co.jp/falcombooks

「んー！　いい朝、というか昼ですねー」

ぐーっと天に向かって両腕を突き出しドロシーは伸びをする。日差しに照らされた街並みの白さがまぶしかった。目に痛いほどだ。

ついでに頭も痛い。

カンペキに二日酔いだ。ややふらつきつつも、ドロシーは石畳を東に向かって歩いている。散歩を兼ねた街の取材のつもりだった。

英雄伝説 空の軌跡
リベール王国スナップショット

リベール通信の名物コンビ

ナイアル＆ドロシーと巡るリベール漫遊記

第3回



主人公のエステル＆ヨシュアがリベール王国はおろか、ゼムリア大陸全体を揺るがしかねない陰謀に対して仲間とともに立ち向かう『英雄伝説 空の軌跡』シリーズ。彼女たちの輝かしい活躍の一方で、それを陰ながらサポートしてきたのが、本作の主人公であるニュース雑誌『リベール通信』の記者ナイアル・バーンズと、新人カメラマンのドロシー・ハイアットだ。本作はそんな２人が生き生きと国内を巡る外伝小説。ぜひお楽しみあれ！

製品情報

好評発売中

著　　：はせがわみやび
イラスト：西野幸治
定　価：1,320円（税込）

「とうぶん延期では仕方ないですから」
なにしろお目当ての人物が街にいないのだ。ナイアル先輩によれば、でゅなんとか公爵は街道先のエア＝レッテンに行っているそうで、街に帰ってくるかどうかはエステルとヨシュアのふたりの頑張り次第らしい。
何をどう頑張るのか判らないが。
行き先が判っているのならば、そのエア＝レッテンまで出向いて取材するという方法もあるはずだけれど、ナイアル先輩にはそこまでする気はないようだ。元々苦手なゴシップ記事だからか。ひょっとしたら街から離れたくない理由でもあるのかもしれない。
通りの右手に大きな橋が見えてきた。
《ラングランド大橋》。
そんな名前がついているらしい。ホテルのフロントで聞いてきた。やはり『跳ね橋』らしく、日に三回ほど中央でふたつに割れて上がるらしかった。
その光景もぜひ見てみたいものだが、ドロシーは今日はまず大橋の先に行ってみるつもりだ。
街の南側は海や川を渡るほうの船の波止場になっている。
橋を渡り始めたところでカメラを構える。
大きな橋の上から見るルーアンの街並みを感光クオーツへと焼きつけてゆく。
空の青、川の青、河口の先に見える海の青。ぜんぶ青い色なのに、すべて違う青なのが面白かった。蒼かったり、青かったり、碧かったりするわけだ。その三つを同時にカメラに収められるのも、ルーアンならではの風景だろう。
ドロシーは写真を撮ることに夢中になった。
いつの間にか頭の痛いことなど忘れている。習え覚えた指の動きは休むことなく、切り取る光景は迷うことなく、シャッターを押す音と、見える景色を褒め称える言の葉だけが澄んだ空に向かって溶けてゆき……。
「む？」
指の動きが止まった。
ファインダーの向こうに気になる光景が映った。
橋のちょうど真ん中あたりだ。少女がひとり、うつむいた視線で川を見下ろしている。
「なんか……よくないです」
ズームしたときの表情が硬い。いや、硬いというか、暗い。思いつめたような、というやつだ。
近づいて、自分でも思いがけないことだったけれど、声をかけてしまっていた。
「あの……」
「……はい？」
のろのろとドロシーのほうに顔を向け、いぶかしげに見つめてくる。
咄嗟に、ドロシーはカメラを構えていた。レンズを彼女のほうに向け、

「笑って」
と言った。
「え？　え？　え？」
「ほら。チーズ、ですよー」
「え？　あ、あの、困ります！」
両手を顔の前に突き出して、ばたばたと手を振る。焦っている顔が可愛かった。
ドロシーはカメラを下してから、少女に向かって微笑む。
「そうそう。笑ったほうがいいですー」
「え？　あ……」
はにかんだような表情をした。ドロシーの手にあるカメラを見つめながら、
「ご旅行、ですか……」
「いえいえ。王都にあるリベール通信社という会社でカメラマンをしてます、はい」
言いながら、手にしたカメラを軽く振る。
「カメラマン？」
「はい。ドロシー・ハイアットです。といっても、まだ成り立ての新人ですよー。鬼のようにおっかない先輩記者の元で修業中の身なのです。美人さんを目にしたら、必ず褒めて写真を撮っておけってのが最初に教わったことでして。きれいな女性は王国の宝だからって。では、と鏡に向かってカメラを構えたら、しこたま殴られましたが」
一気にそうまくしたてたら、ぽかんと口を丸く開けた。
それから、ぷっと吹き出して、ふわりと微笑む。素朴な笑みは彼女によく似合っていた。
「あ、いえ、その笑って……ごめんなさい」
「いえいえー」
——嘘をついた甲斐があるというものです。先輩、鬼扱いごめんなさい！
「ええと、あの。……ユミナです」
そう言って、ぺこりとお辞儀をする。歳は、十五、六というところだろうか。エステルちゃんと同じくらいに見える。肩まである金色の髪を左側でまとめていた。先ほどまで暗く沈んでいた琥珀色の瞳にほんの少しだけ明るさが戻っている。
「ふむ。あの……ユミナちゃん」
「は、はい」
「差し支えなければ、なぜそのような暗い顔をしていたのか話してみませんか？　わたしでよければ話を聞きますけれどー」
図々しい言いようだと自覚はあったけれど、気になってしまったのだから仕方ない。
ユミナはためらいを見せた。
けれど……こちらが彼女にとっては通りすがりの旅人だからだろうか、ぽつりぽつりとだが

話してくれた。
ペンダントを川に落としてしまったんです。
幼馴染みの彼からの、たったひとつの贈り物でした。

6

あたしと彼は子どもの頃から一緒に育った仲だったんです。
ルーアンの波止場が遊び場でした。
この橋の向こうで、朝から日が落ちるまでずっとずっと一緒に遊ぶような。
まるで犬の子どもみたいにふたりしてコロコロと転げ回っていたんです。真っ黒に日焼けしてしまって、あたし、男の子と間違われることもしょっちゅうでした。
もうすこし歳をとってからは、そこまで遊ぶことはなくなってしまいましたけど。
それで……。
彼の家は代々漁師で、おとなになったら自分も親の後を継ぐのだと、いつもそう言っていたんです。
彼の父も、祖父も、港一の漁師と言われたほどの釣り師で、彼自身もいずれは祖父や父の記録を塗り替えるだろうと言われていて。
それほどの腕前だったんです。
ところが、ひと月ほど前から彼は魚を獲ることをやめてしまった……。
しかも、《レイヴン》という荒っぽい人たちがいっぱいいるグループにいつの間にか入ってしまって……。一日中、波止場の使われていない倉庫に入り浸って遊んでいるようになってしまって。
あたし、何度も『何があったの？』って聞いたんです。
でも、ちっともあたしの言葉になんて耳を貸してくれなくて……。
もうあたしどうしていいのかわからない。
昨日も、この場所でぼーっと考えこんでいたら、橋の上がる時間になっていることを忘れてしまって、あやうく大変なことになるところでした。大慌てで袂まで戻って。
そうして、気づいたときにはペンダントが無くなっていたんです！

7

「もしやと思って、橋が下りてから戻ってきたんですけれど……見つからなくて」

「じゃ、そのペンダントはひょっとして……」
ドロシーは視線を橋の下へと向けた。
「はい、たぶん」
「落ちちゃったのかー」
そう言ったら、ぽろり、と滴が一粒、ユミナの頬を伝って落ちた。
あああ。
――しまった。泣かせちゃいました。どど、どうしましょう！
「えっとえっと」
「あ、ご、ごめんなさい」
ぐしっと袖で涙を拭ってユミナは頭を下げた。謝ることなんてない。むしろ謝りたいのはドロシーのほうだった。
おそらく彼女にとってペンダントは単なる幼馴染みの贈り物ではないのだ。
見ていればわかる。ユミナはその男の子のことが好きなのだ。彼女に将来の夢を語っていたその少年が不良化してしまって彼女とロクに会ってもくれなくなった。
ペンダントを失ってしまったことが、彼との仲の終わりを示しているように思えて、それでずっとあんな瞳で川面を見つめていたのだ。
――でも、それ、よくないですよぅ。

思いつめている人間はちょっとしたことで過激な行動をとりがちだ。そう先輩が言っていた。王国中を飛び回ってたくさんの記事を書いてきた先輩の言葉だけに、そのあたりは信用がおけそうな気がする。
「あの……ユミナちゃん。その……元気を出して」
――あああ、こんなこと言ってもきっと意味ないですよねっ。
「はい。ありがとうございます」
「えとえと……」
――なにか、わたしにもできることはないでしょうか。
「見ず知らずの方にまで心配をおかけしてごめんなさい」
「いえ、そんなことは。そうだ。ええと、その、彼の名前は？」
不良グループに入ったばかりと言っていた。何か、きっかけがあったのかもしれない。それがわかれば……。ドロシーだって新聞社の人間だ。つまり、真相を突きとめる側の人間であるからして――。
「カイヤ、です、けど」
――あるからして、だから、そのカイヤさんが不良化したきっかけさえわかれば……。
「…………カイヤ？」
はて。

どこかで聞いた覚えがあるような。

8

「で、俺にどうしろってんだよ」
不機嫌そうな声で言ったのはナイアル先輩で、ドロシーは彼のために魚卵の酒蒸しを自分の皿からすくって分け与えた。魚卵の酒蒸しは、ココ、南波止場にある酒場《アクアロッサ》のお勧めメニューだ。
夕食時だから、かなり混雑している。海の男らしく肌を日焼けさせた人たちがいっぱいたむろしていた。
ドロシーのおすそわけを睨みつけて先輩がつぶやく。
「なんだよ?」
「わたしのぶんもあげますから、これで知恵を貸してくださいよぅ」
「や、安い買収だな、おい!」
「そんなことありませんってば。百年ものの古酒を使った逸品だって話ですよ。わたし、酒はもう懲りましたので今日はいりませんし。ほらほら、食べるだけで身体が温まるシロモノですってー。ぽかぽかしてきちゃいますよ、きっと。百年古酒って強いお酒ですから!」
「あのな……『今日は』いりませんって、全然、懲りてねえよ!」
「そーですか?」
「だよ! だいたいな、俺たち記者は、記者であって遊撃士でも探偵でもねえ! ましてや、他人の恋愛ごとに首を突っ込むのなんて俺はごめんだぞ」
ロクなことにならない、なんて先輩は言うのだ。
ドロシーとしては、それを聞いても引き下がるわけにいかない。あの、ぽろっと零れた彼女の涙を先輩ってば見てないのだ。きゅんときた。こっちの胸まで痛くなった。あれを見て、なお、何もしないという選択肢はドロシーの中になかった。
「あのなぁ……」
「カイヤさんが不良化したのにはきっと理由があると思うんですよぅ。だって、そうじゃないと、あんなにカワイイ幼馴染みを放っておくなんてありえないですー。敏腕記者のナイアル・バーンズだったら調べられますってば!」
「可愛いはおまえの個人的見解だろ!」
「そんなことないです! ほらほら!」
ここぞとばかりにドロシーはカメラを取り出した。
記憶子に焼きつけた映像をオーバルカメラの背面にある投影版に映して見せる。
両手を顔の前に突き出し、照れた表情を浮かべたユミナの顔をアップにしてから、先輩のほ

うに向けた。
　じっと見つめた先輩の唇が閉じた。む、と口をへの字に曲げる。これはドロシーの主張を認めた証だ。
　それを見てから、ドロシーは背面の操作盤を指で撫でて、もう一枚の写真を投影版に引っ張ってきた。
「実はですねー。わたし、ユミナさんから彼の名前を聞いたときに、聞き覚えがあることに気づいたんです」
　ナイアル先輩は口を閉じたまま聞いている。
「カイヤ、って、彼も呼ばれてました」
　くるっとカメラの投影版を先輩に向ける。そこには、大橋を南に向かって駆けていく不良さんたち四人が映っている。ドロシーにぶつかってきた男たちだ。いちばん最後尾を走るのは肌を浅黒く日焼けさせたもっとも若い少年だった。
「ほら、この子ですー。振り返ってるから、顔がわかりますよねー。この子がカイヤくんですよ！」
　ということは、おそらくあの先輩不良一味が《レイヴン》なのだ。『渡りカラス』なんて恰好いい名前が似合うような人たちではなかったけれど。カイヤひとりがなんとなく浮いていたのもわかる。彼は一味に入ったばかりだからだ。
　浅黒い日焼けした肌はあれは海の男だったからで……。

「……ドロシー」
　いちど目を閉じてからナイアル先輩は口を開いた。
「そんなに言うなら交換条件だ」
「はい？」
「もうじきあのふたりが戻ってくる」
　あのふたり、というのがエステルちゃんとヨシュアくんのことだとすぐにわかった。
「あいつらのことだからな。時間は掛からねえよ。で、だ。そうしたらあの公爵にインタビューしなきゃならねぇ」
「はいはい。そうですねー」
「ですねー、じゃねー！　おまえもたまには手伝いやがれ！　あのなっ。お忍び中の貴族がそうそう一介の記者の取材に応じてくれると思うか!?」
「無理じゃないでしょうか」
　そう言ったら、がっくりと肩を落とされた。何か悪いことを言ったでしょうか？
「デュナン公爵ってのはな。性格がわりぃことで知られてるんだよ！　ずうっと考えてるんだが、どうやったら取材に応じてくれるか、さっぱり思いつかねぇ」
「ずっと考えてたんですか？」
「ああ、ずっとだ」

「先輩！」
「なんだよ」
「やる気のないように見えて、ちゃんと考えてたんですねー」
ぱちぱちと小さく拍手したら、ぎろりと睨まれた。
「交換条件だ。手伝って欲しけりゃ、こっちの手伝いもしやがれ！　おまえも考えてもらうぞ！
公爵にインタビューする方法を！」
そういうことか、とドロシーは納得した。
その、でゅなんちゃら公爵とかいう性格の悪い貴族の人から、どうにかして記事を取らねばならないのだ。
「ううん……」
——これは難題かもですねー。
お忍び中なのだ。そもそもルーアンにいるということだって知られたくないはず。
しかも、聞いているかぎり、常にエラそうで威張っているような人なわけで、そういう人物が喜んで取材に応じるなんて状況はとてもじゃないが想像できない。
だが、ここであきらめたくはない。
真実を切り取るのがカメラマンの仕事だ。それがどんな真実だろうと。世界は美しいものだけでできているわけではない。わかっていた。

けれど、悲しい真実はドロシーは苦手なのだ。
ユミナの涙が脳裏に浮かぶ。
胸の痛くなるようなコトは幸せのためのスパイスだと思いたい。状況をひっくり返したければここで諦めちゃだめだ。

——まったく、なんでカイヤくんは子どもの頃から語っていたという漁師になる夢を捨ててしまったのでしょうか？
ん？　漁師？

閃いた！

「釣り……はどうでしょうか、先輩」
「はあ？」
ナニヲイッテルンダコイツハ。
ナイアルの顔つきがそう言っていた。
「だからですねー。こっちが勝手に記事にするんじゃなくて、向こうが記事にして欲しいって頼んでくればいいわけですよぅ」
「……どうやって？」

「釣りです！　すんごい獲物を釣れば、向こうから記事にしてくれって言ってくるんじゃないでしょうか！」

ドロシーには確信があった。

王族を笠にきて威張り散らすような輩だ。自尊心は山より高いに違いない。そんな人物が大物を釣り上げて自慢するのを抑えられるだろうか？

できない、とドロシーは睨んだ。

「いや、そうは言うけどよ。公爵が釣り上手だなんて話は聞いたことがねえぞ？」

「だから助手をつけるんです。釣り名人を助手にすれば、大物を釣れる可能性が広がりますよねー」

「釣り名人ー？」

そんなのどこにいるんだよ、とナイアルが乗ってきて、心の中でにやりとドロシーは悪い笑みを浮かべた。よし、かかった！

「ひとり、わたし、知ってるんですよー。しかも、この港で一番の漁師です！」

9

潮の香りがドロシーの鼻をくすぐっている。

海港都市ルーアンの南にある倉庫街だ。酒場を出て少し南へ歩いたあたり。

黒々としたシルエットとなって聳え立つ波止場の倉庫の前で、ドロシーは考えていた。

まずは――きちんと確かめることからだ。ドロシーのポーチを拾ってくれたカイヤが、ユミナの言う《レイヴン》のカイヤなのかどうか。

「おうい、ドロシー！」

声に振り返る。

「ナイアル先輩！」

「東の端に使われてない空き倉庫があるそうだ。連中はそこでたむろっているってよ」

「空き倉庫、ですか」

「ああ。最近じゃ水上輸送は下火なんだ。飛行船での貿易が主流になってきてるんだよ。ルーアンも観光都市に変わりつつあるみてーだし」

ナイアルが、調べてきたルーアン事情を話してくれる。

ぶつぶつ言いながらもこうして必要なことをやってくれる人なのだ、ナイアル・バーンズという人物は。

「けっこうやんちゃな連中が揃ってるらしい。おまえはホテルに戻ってろ……って、聞くような性格じゃなかったな」

やれやれと肩をすくめられた。

海へと流れ込む川の河口に突き出るようにしてその倉庫はあった。
あたりに幾つも立ち並ぶ倉庫と形は変わりばえしないが、最近使われていないのだろう証に、荷を運ぶ台車や空き箱、荷を縛るロープのような実作業に付き物の道具が近くに見当たらない。
ただ、建物だけがそびえていた。
閉ざされた扉の向こうに人の気配がある。
ナイアルがゆっくりと扉を押し開ける。錆びついた鉄のこすれる音があがった。
導力は通っているようで、薄暗い明かりがぼんやりと倉庫の中を照らしている。三々五々とばらばらに散っていた少年たちの何人かが振り返って、ドロシーたちのほうへと顔を向けた。
「なんだあ、ねぇちゃん、あんちゃん。ここはおまえたちみたいな、小奇麗なやつらがくるとこじゃねえぞ。あっち行きな、あっち！」
「っと、待てよ、ディン。そっちの眼鏡のねえちゃん、どっかで見たことねぇか？」
「んあ？　なんだってぇ？」
ディン、と呼ばれた若い男がドロシーのほうへと近寄ってきて、しげしげと顔を見つめてくる。ドロシーのほうも思い出した。
「あ、やっぱり橋のところで会った、おっかない先輩不良さんですよぅ！」
「おっかねぇだと？」
「はい。主に顔が」

「てめっ、言ってくれるじゃねえか！」
「おまえはひと言多いんだよ！　って、ああ、聞いたの俺か！」
「こいつら……おもしろい漫才やってくれるぜ」
「そうだなあ、ディン。ちっとばかりおしおきが必要みてぇだなあ」
じりっとディンとロッコがにじり寄ってくる。周りの連中も、おもしろい余興が始まったとばかりに囃し立てるだけで止める気はないようだ。
ふたりの迫力に思わず一歩下がってしまったドロシーだったが、入れ替わるように、すっとナイアルが前に出た。
「悪かったな。機嫌を直してくれ。別に喧嘩をしにきたわけじゃねーんだ」
「ちっ！　ちんちくりんのくせに男連れかよっ！」
灰色の髪をしたロッコのほうが切れた。かなりの短気だ。
「お、おい待て。俺とこいつは別にそんなのじゃ……」
「ひとりものの無念を思いしれええええ！」
――それは言いがかりって言うんじゃ。
などというドロシーの心の中の突っ込みは聞こえるはずもなく、ロッコが、まくった袖から伸びる太い腕をナイアルにぶつけてきた。
ナイアルは一介の新聞記者だ。それなりに危ない現場での取材もこなしているとはいえ、遊

撃士のように荒事に慣れているわけでもなければ、戦いの訓練を積んだわけでもない。
それでも避ければ避けられたはずだ。だが、彼の後ろにはドロシーがいた。
「センパイッ！」
ドロシーは思わず叫んでいた。
まともに叩きつけられた拳を、ナイアルは顔の前で組み合わせた両腕で辛うじて防いでみせた。そうしなければドロシーが殴られていたからだ。衝撃は殺し切れず、彼の唇からくぐもった声が漏れる。
「へ……。そういう女の前で格好つけるのが一番気に入らねえんだよっ！」
拳を引いたロッコが距離を取って足で拍子を取る。拳を左右交互に振ってから、「いくぜ！」と叫んでふたたびナイアルに向かってきた。
このままだと今度こそやられてしまう――そうドロシーが考え、反射的に構えたオーバルカメラのフラッシュを焚こうとしたときだ。
ドロシーの脇を風が吹き抜けた。

10

誰かが走りぬけたのだと気づいたのは、その影が、まばたきするほどの時間でロッコとディンのふたりに躍りかかってからだった。
「うお⁉」
「なっ！」
短い言葉を発して、ロッコとディンの身体が宙に浮き、硬い床へと叩きつけられていた。
「ロッコ、ディン！　うわあぁ、だいじょうぶかあ！」
ふたりの後ろにいた一番性格の軽そうな男が慌てている。
「おい。レイス……」
「あ、あ……。兄貴ぃ」
「ロッコ、それにディン……。おまえら、まだ、こんなことやってんのか？　言っといたはずだよな、今度こんな真似してるところを見つけたら容赦しねえって」
そう言い放ったのは、大きな剣を背中に背負った赤毛の青年だった。細身に見える身体をしているが、軽鎧から覗く腕も首も目の前の若者たちよりもひと回り太い。鍛えあげられた身体だ。
赤毛の青年の一喝で、《レイヴン》の若者たちはたちどころに大人しくなった。
相当、恐れられている人物のよう。
《レイヴン》の男たちは、一転して愛想笑いを浮かべ、ドロシーとナイアルに対して紅茶まで出してくる始末だ。さすがにお菓子はつかなかったけれど。

「すまなかったな。こいつらの不始末は俺が後でよ～く言ってきかせておくからよ」
赤毛の青年の言葉に、後ろにいた強面の不良たちが震える。ほのかな導力灯の明かりの下で青ざめた顔が陰気に並んでいた。
「で、新聞記者とカメラマンが、《レイヴン》に何の用がある？」
「あー。俺たちはカイヤって名前のヤツに、ちょっとばかり聞きたいことがあるだけなんだけどな」
「そうですそうです」
「カイヤ……？　そんな名前のヤツいたか？」
赤毛の彼の問いかけに、ロッコが「あ、そいつなら最近入ったヤツです」と答えて、背後の男たちの中に呼びかけた。応えて、ひとりの少年が前に出てくる。
「あ、やっぱり」
ユミナから聞いていたとおりの若者だった。
ドロシーのポーチを拾ってくれた人物でもある。
「あんたがカイヤか」
とナイアル。
「ああ」
「あの……ユミナさん、ご存じですよね？」

ドロシーがその名を出したとき、カイヤの顔が苦いものを噛んだときの表情へと変わった。
「あんたたちユミナの……」
「あの……ごめんなさい。事情を聞いてしまったんです。それで、あの……何があったんですか？」
「別に、なんにも……」
「なんにも、って……ユミナさんが心配していたですよ。漁にも出なくなっちゃったって……」
そう言ったドロシーの言葉に、だがカイヤは押し黙ったまま微かに首を振った。
これ以上、話すことはない。そんな感じに見えた。
「ま、おまえさんの事情は置いといて、だ」
ナイアルがそう言ってから、公爵の釣りの手助けをしてくれないかと切り出したが、カイヤの答えは芳しくないものだった。
「おれはもう漁師はやめたから……」
ぼそっとつぶやくように言ってから、「もう、いいっすか」とたむろっている仲間たちの元へと戻った。
それ以上はどうすることもできず、ドロシーたちは引き上げるしかなく。
——いったい、何があったというんでしょう？
ホテルへと戻る道すがら、ドロシーは暗い瞳をしたカイヤについて考えを巡らせてみたのだ

けれど、何も思いつかなかった。どこかであんな瞳を見た気がするのだけど……。あまりにも自分はあの若者について知らなすぎると思った。
ホテルのフロントへと辿りついたところで、ナイアルが「仕事に差し支えるからさっさと寝ろ」と言ってから街へと引き返した。何かの取材の続きだろうと思ったドロシーだったが、ひとつだけ気づいたことがある。
――先輩、ホテルまで送ってくれたんですね。
まだ宵の口だ。でも、そのまま波止場で別れて取材に繰り出さずに、わざわざ街の反対側にあるホテルまで送り届けてくれたのだ。
――ふふっ。たまに先輩らしいですよねー。
ベッドに入って毛布にくるまる。落ち込んでいた気分が少しだけ浮上してきた。
いい夢が見れるだろう。明日はもうすこし元気になって、きっと、いい考えも浮かぶに違いない……。

11

寝つきのいいドロシーがベッドで寝息を立て始めた頃。

ナイアルは、波止場に一軒だけ存在する酒場《アクアロッサ》で漁師たちの集うテーブルについていた。
もちろん、酒を呑みたかったからではない。
「じゃあ、カイヤってのはあんたたちから見ても相当に釣りの腕があるわけか」
ナイアルの問いかけに、ああ、とガラガラ声の男が答える。腕の太さがナイアルの倍はある大柄な男だった。
「この港じゃ一番だな。おやっさんの域にはまだまだだけどよ」
「ほう。……その、おやっさんてのは?」
ナイアルの問いに、ガラガラ声の隣にいた皺だらけの老人が答えた。
「カイ坊の親父じゃ」
「ああ、そういや代々漁師だとか言ってたな」
「惜しい男を亡くしたもんじゃ」
そう言って、小さなグラスに半分ほど残っていた液体を呑み干した。赤ら顔をなお赤くさせて、重いため息を吐く。
遠い海まで出て戻る途中だったという、月の無い暗い夜、急変した天候、時化に会って、とぼそぼそとつけ加える。
船は転覆し、船乗りたちは誰ひとり帰らなかった。流れ着いたのはバラバラになった船の欠

片だけ。カイヤが十四のときだったという。
　泣いて泣いて沈み込むだけの母を支えたのはカイヤだった。
「それがどうして漁に出てこなくなったんだ？」
　そう尋ねると、テーブルの男たちは互いに顔を見合わせた。途端に口が重くなる海の男たちの中、最初にナイアルが奢ったガラガラ声の男が応えた。
「やっぱ……あれが原因じゃねえかな」
「あれ？」
「そのちっと前からおかしくなってたんだよ。なんてったかな……」
「『見えない』だろ？」
「ああ、それそれ」
「見えない？」
「ん。あのな、カイヤのヤツは針に食いつく魚が見えるんだと。どんなに水が濁っていようと、何セルジュ深い水底を泳いでいようとさ」
　どこかで聞いたような話だな、とナイアルは思った。
「で、それが見えなくなった、と？」
「ああ。ま、それでも俺たちよりか、よっぽどたくさん釣り上げるんだけどよ。アイツには我慢できなかったらしい」

　いらいらが募っていたところでヘマをした。
『ばっかやろう！　漁を舐めんな！』
　漁師たちをまとめる親方にそう一喝され、あくる日から浜に出てこなくなった。気づけば《レイヴン》とかいう不良たちのグループにいつの間にか混じって、日がな一日だらだらしている始末だ。
「なるほどな」
　なんとなくナイアルにも事情が飲み込めてきた。
　――これだから天才ってヤツは……。
「ユミナちゃんもかわいそうにな」
　ガラガラ声の男がそうつけ加えて、周りの男たちも同時に頷いた。
「ユミナってのは……」
　ドロシーが出会ったという少女の名だ。そこまでは覚えていた
「可愛い娘(こ)なんだぜえ」
「カイヤにはもったいねえ」
「ちっこい身体で子犬みてえに、とととっと岸壁を走ってくる姿を見ると、もう、撫でまわしたくなるほどだよなっ」
　そう言った男を見て、ナイアルは思わず心の中で突っ込んだ。そりゃ、あんたから見たら誰

だってちっこい身体だろうよ！　自分よりも頭ふたつ分は確実に大きい男だったのだ。胸板だって倍は厚い。その巨漢が身体をくねらせて「可愛い」を連発してみろって、ほら鳥肌が立ったじゃねえか。

「それが毎日カイヤの野郎に弁当を届けるためだってのが気に入らねえがよ！」

大声で言って、ちげえねえ、と男たちが同意する。

そうして話は元に戻る。カイヤが船に乗らなくなったので、波止場の男たちも彼女の姿を見られなくなった。ずんと重い雰囲気に戻る。気分が上がったり下がったり忙しい。まあ、単純なのだ。よくいえば素朴。

「健気な嬢ちゃんだで。自分だって辛かろうにのう」

赤ら顔の老人が言った。

ユミナの父もまたカイヤの父と同じ船に乗っていたのだ。

ジェニス王立学園に通うという夢も砕かれて、それでも今は自らの手でお弁当屋を開くのだと頑張っている。

「お、俺は、店が開かれたら一番に行くからって言ってあるんだぜ！」

うっかり言った男がいたものだから、いや一番は俺だとそれぞれが言い始め、そこから先は言い合いになって、まともなことが聞ける状態ではなくなった。

――まあ、収穫はあったか。

こっそり席を立って勘定を済ませると、ナイアルはホテルに戻った。

隣のベッドで幸せそうな顔をして寝息を立てているカメラマンを見つめながら、ネクタイを緩める。靴を脱ぐのも面倒でそのまま自分のベッドに転がった。

さて――どうしたもんか。

考えているうちに意識が闇の中に落っこちた。夢も見なかった。

12

正午を知らせる鐘が鳴って、ナイアルは目を覚ました。首を曲げると、もうドロシーのベッドは空になっていた。

ずきんときた。

枕から頭を持ち上げようとして、思わず頭を抱え込む。

「っう……。こいつはヤバイ」

枕元の水差しからコップ一杯の水を喉へと流し込む。海の男たちはどいつもこいつも新聞記者とは身体の作りが違うらしい。あのまま付き合ってたら、今日は仕事にならなかったところ。

「あのトンチキ娘……どこへ行きやがったんだ？」

テーブルには書き置きらしきものは見当たらない。

着替えてフロントに上がる。
そこでナイアルは思いがけない人物を見た。
偉そうにふんぞり返った髭の男と、ひょろりとしていて腰の低い年配の男のコンビだ。
デュナン・フォン・アウスレーゼ公爵殿とその執事だった。
フロント係を困らせつつ最上階の部屋の鍵を受け取っている。
——さすがにあいつら仕事が早いな。
どうやら、エステルとヨシュアの遊撃士コンビは、公爵殿を首尾よくエア＝レッテンから引き剥がし、ルーアンの街に連れ帰ることに成功したらしい。
やって、みるか、と腹をくくる。ついでにネクタイも締め直した。
「公爵殿とお見受けしますが……デュナン・フォン・アウスレーゼ様でしょうか」
名前ではなくて、爵位を先に出して言うところがコツだ。
地位を殊更に強調するものはその地位に自信がない。自分に合った身分に居るのならば自分を誇ればいいのであって地位を言い立てる必要はないはずだからだ。
つまり——自分に自信がないから虎の威を借りている。
だからこそ、見た目でさも公爵然としていますね、などとおだてられると……。
「ああ、うむ。わかるかね」
相好を崩して口許をゆるめた。

「それはもう。見るからに堂々たる押し出しで」
「うわっはっは。そうだろう。なあ、フィリップ、判るやつには判るのだ！」
ほら、ガードがゆるんだ。こういうところは——まだ善人の印だ。本当の悪党はこの程度では警戒を解かない。
「で、お前は誰だ？」
「おれ……私はナイアル・バーンズと申します。リベール通信社の記者をしておりまして」
「なんだ、記者風情か」
——ふぜい、だと？
「あー。……そうですね」
いかんいかん、思わずむかついて殴りつけるところだった。記者なんて敬意を払われるほうが珍しいのだが、この公爵の言いようときたら……。
「お忙しいところを恐縮ですが——」
と、まずは正攻法で取材を申し込んでみる。
「ダメだダメだ。私は暇ではないのだぞ。これでも次の国王となる身だからな！」
「いや暇だろ——」
じゃなきゃ、お忍び旅行なんてできねえよ、とつい言ってしまいそうになってまたも口を閉じる。

「ん？　何か言ったか？」
「いえ。……時に、公爵様は釣りにはご興味がおありですか？」
「釣り、とな？」
「ええ……。確か、このホテル《ブランシュ》には釣りの道具一式と船が用意されていると聞いたような。ですよね？」
と最後の部分はフロントのほうへと振り返って問いかける。
ホテルのほうも心得たもので、にこやかな笑みを顔に張りつけたまま、
「はい。申し出て頂ければご用意させていただきます。ボートもありますし、ちょっとした遊覧もできますよ」
と、答えてきた。ホテルとしても公爵様の機嫌を損ねたくないのだろう。竿や餌はどこから調達してくれるに違いない。さて——どうでる？　と、ナイアルはデュナン公爵の返事を待った。
「ふむ……ところで何が釣れるのだ？」
——そうきやがったか。関心だけは見せてくれたようだが……。
問われてもナイアルもルーアンに詳しいわけではない。そんなこと判るわけがない。だが、このときはフロントが味方してくれた。
「メッシーナなども採れますが、大物を狙うならクロディーンでしょうか。噂では百リジュを越えるヌシがいるとか、いないとか」
「ヌシ……だと？」
「はい。三十年釣れたことがないとか。釣り上げればかなりの釣果です。きっと、リベール中の話題になるでしょうね」
こっそりと打ち明けるようにして言うものだから、公爵の目つきが変わった。
そこから先は順調で、どうやら公爵の関心を安全なところに向けておけるなら歓迎らしい執事の口添えもあって、とんとん拍子で公爵様の釣りの予定が決まった。
これで、公爵のほうはどうにかなった。
あとはどうやってカイヤを引っ張りだすかだが……。

13

「あ、ナイアル先輩」
部屋の扉を開けたら、ドロシーが戻っていた。ベッドの上に座り込み——。
「おまっ、何食ってやがる！」
「お腹空いたんですよぅ。お昼にはまだちょっとありますし。このチーズ美味しいですねー」
「俺の買い置きをてめえ」

――とっておきだったのに！
　まあ、いい。こいつは今まで何をしていやがったんだ？
　ナイアルの問いかけに対するドロシーの答えは想像を超えていた。
「カイヤ君に公爵の釣りの指導を頼んできました」
　驚いたのって。
「どうやったんだ！」
「そりゃもう、家にお伺いして誠心誠意を尽くしたんですよー」
「という建前は置いておいてだな」
「あれあれ。やはり信じてくれませんかぁ」
「欠片もな！」
「そこまで！」
　わざわざ愕然とした顔を作るんじゃない、とナイアルは心の中でツッコむ。
「で、何をした？」
「前にも言いましたように、カイヤ君とはこの街に来た日に出会ってるんですよね」
　と言いながら、オーバルカメラで撮ったいつかの写真を見せてくる。橋を南へと渡っていくカイヤの背中を映したやつだ。顔は振り返っているから判るものの全体的に画像は小さくて荒い。

「このポーチを拾ってくれたんですけど」
　腰に引っ掛けていたポーチを掲げる。ポムがでかでかとプリントされたキラキラポーチは凶悪なまでに可愛らしかった。
「写真を見せつつ、実は拾ってくれたときの写真も撮っていたんですよ、と。それはもう、ポムちゃんの愛らしいポーチを抱えたカイヤ君のお姿なわけですよ」
「お、おう」
「引き受けてくれないなら、代わりにその写真を『《レイヴン》メンバーの意外な少女シュミ』というタイトルで記事にしていいですか？　と笑顔でお願いしたら、あっさり」
「脅迫じゃねえか！」
　確かにそんな写真がリベール通信に載ろうものなら、街ですごみを効かせることなんてできそうもない。それにしたって不良グループのメンバー相手に危ない橋を渡るヤツだと思ったが、ドロシーはさらっと「悪いひとではないと思いましたので」と言った。
　ナイアルとしては感心するやら呆れるやら。
「そういや、考えてたんだが……あのカイヤってのが漁に出なくなった原因だけどな」
「ボースでのわたしと同じ、ですよね」
「気づいたか」
　ルーアンに来る前のボースの街で、ドロシーは一時的に写真が撮れなくなった。

風景の表情が見えると言うオーバルカメラの天才ドロシーがだ。

「今となっては何がきっかけだったか判らないんですけど。何を見ても、どのコもどんな気分なのか判んなくなっちゃって。笑って欲しいのか、お澄ましして欲しいのか、それすら、判んなかったんですよぅ」

ドロシーが言った。

そもそも、風景の感情なんてものは、普通の人間には読めないものだと思うのだが。

「先輩はそーゆーとき、どーしてるんですかぁ」

「俺か？」

記者で言えば、記事が書けなくなったとき、ということだろうか。

ナイアルにとって、その答えはとてもシンプルなものになる。そもそも記事が最初から思い通りに書けた試しなんてない。できないことが当たり前なので、できなく「なった」という経験が、残念ながら今のところないのだ。

「それでも締切は来るんでな。やらないわけにいかないしなー」

「まあでも……そーゆーことかなって、わたしも、ちょっぴり……」

このまえ思ったんですよね、とつけ加える。

だから、とにかくもういちど漁師の仕事と向き合わせることだと考えたわけだ。

天才ゆえのスランプに万能の対処法なんてあるものか判らないが、それでもこれは何かせず

にいられないナイアルたちの性分なのだった。

「まあ、何かしたっていう自己満足が欲しいだけかもしれないですけど」

いきなり自信なさげになって俯くものだから、ナイアルは困った。

——だから、ため息なんて吐くなってーの。

自分にはこーゆーときのうまい対処法も心得がない。

「それが判ってるんだったら、いいんじゃねーの」

言いながら、二、三度、ドロシーの頭を軽くぽんぽんと叩いた。えへへ、とドロシーが眼鏡の奥の目を猫のように細めながら、少しだけ顔を明るくする。

もうすこし何か褒めてやれそうなことは……。

「そういや……」

ひとつだけあった。

「よくポーチを落として慌ててるときに写真を撮ってたな。たいした——」

「あ、さすがにそれは無理でしたよー」

——なんだって？

「つまり、そこは嘘です」

ドロシーはにっこり笑って言うのだった。

こ、このトンチキ娘ときたらまったく……たいしたやつだ！

14

朝、というにもまだ早い時刻。

「ふあぅふふぅふぁ……むにゃ」

欠伸が漏れる。ドロシーは、眠い目をこすりながらナイアルの服の背中をつまんだまま歩いていた。ホテルの廊下には明かりがかすかにしか灯っていないので、そうしないと転んでしまうのだ。

ホテル《ブランシュ》の裏手、西に面した扉を開ける。

潮風が顔に当たり、目が覚めた。扉の向こうに広がっていたのは黒々とした夜の海だ。小さな桟橋が揺れる海面へと突き出している。

ボートが一艘留まっていた。

すでにカイヤが乗り込んでいた。仏頂面を隠そうともせずに、それでも黙々と船を動かす準備をしている。導力機関の調子を確かめ、船に乗せた釣り具の具合を確かめ。

「置いてあった船よりでかくねえか？」

ナイアルのつぶやきを聞きつけ、桟橋に立ってカイヤの働きぶりを見ていた船の管理人らしき老人が言う。

「人数が多いですからな。ひとまわり大きい船を借りて参りました」

「多いんですか？」

ドロシーが尋ねると、「五人ときいております。いつもの船ではそんなに乗れません」と返してくる。

そんなにいたっけとドロシーは指折り数えてみた。

まず、自分とナイアルだ。それからカイヤ。ここまでで三人。これに今回の一応は表向きの主役である公爵。

これで四人。あれ、足りない？　それとも、このおじいさんも乗るのだろうか。

「ああ、眠い眠い。それにまだ暗いではないか。こんな中で釣りなどできるものか。魚も見えんぞ」

「閣下。そうは申されましても」

公爵と執事がやってきた。そうか。執事さんがいた。なるほど、これで五人。

「ふああ。でも確かに眠いですよぅ」

「我慢しろって。まずめに合わせたんだろ」

ナイアルの言葉を耳にした船の上のカイヤが、かすかに意外そうな顔をして、ナイアルのほうをちらりと見たことに気づいた。

「まずめ？　それ、なんですか先輩」

「あー。だから、日の出や日の入りの前後の時間をそう言うらしい。朝の早い時間を朝まずめ、夕方を夕まずめ。釣りに良い時間ってされてるんだよ」

「へー」
　ナイアルの言葉は公爵にも聞こえたようで——聞こえるように言ったのだろうけど——公爵が気まずそうに咳払いをした
「し、知っておったわい。そうそう朝まずめしだな」
「まずいご飯は美味しくないですよねー」
「おまえはしゃべるな」
　ナイアルに怒られた。
　五人でボートに乗り込み、桟橋を離れる。船の導力機関を動かすのはカイヤの役目だ。
　白い波を後ろに追いやりつつ船はゆっくりと動き出した。
「どっちに行くんだ」
「……川のほうに戻る」
　そう言いながら舳を返した。海を背中にして進み始める。
　行く手の東の空の下の方がうっすらと白くなってきたかなという頃だった。
　このまま進むと……。
「橋で進めねえんじゃ……。ああ、橋が上がるか」
《ラングランド大橋》は跳ね橋で、日に三回ほど真ん中で割れて跳ね上がるのだ。その時だけは船で川を遡れるようになる。朝の、まだ人が行き来しない時間に最初の一回目がくるはず。

「橋は越えない。狙うのはクロディーンだと聞いている」
「ヌシだ」
　デュナン公爵が言った。文字通り雑魚には用がないという意味だ。
「……橋桁のあたりに隠れたポイントがある。クロディーンなら、それなりの大きさを釣れるはずだ」
　そうぽつりと言った。
　暗に、そうそう大物なんて釣れないぞ、というニュアンスが込められている。
　しかし、公爵様にはその手の機微を読み取る感性はなかったようで、
「それなりではない。いちばん大きいヤツを釣るのだ！」
　カイヤは黙って船を操った。

15

《ラングランド大橋》が見えてきた。
　徐々に白くなってきた東の空を背景にして黒々と横たわっている。
　こうして川面から見上げると、ひときわ橋の巨大さが際立つ。長さが百アージュ以上ということは、ドロシーたちの乗るボートのおよそ二十倍ほどか。それなりに大きいボートなのに、

橋の大きさに比べれば木の葉みたいなものだ。当然のことながら、大きな橋を支える部分もそれなりに巨大で……。
　その橋桁の近くで船が止まる。
「なるほどな。確かにこのあたりのポイントじゃ、陸からは狙えないな」
　ナイアルがぽつりとつぶやく。ドロシーもぐるっとあたりを見回して納得した。橋桁は川に食い込むように建てられているから陸側からでは回り込めない。
　しかも橋桁でぶつかった川の流れが渦を巻いていた。これでは落ちたら危ないから近寄らせてもくれないだろう。
　カイヤが不思議なことを始めた。
　船に乗せてあった釣竿を順に並べだしたのだ。ちゃんと餌もつけてから、橋桁の周りのあちこちに針を放り込み、船の側面に並べていた支えに置いてゆく。
　――あれあれ？　釣りをするのは髭の公爵さんだけだと思ったのですが。
　それにしては、竿の数が多い。五竿、いや六竿か。船に乗っている人数以上をずらっと並べてしまった。
「なんだこれは……？」
「……公爵様はどうぞいちばん左のを使ってください」
「釣るのはわたしだぞ！」

「はい」
　横柄な態度にも、カイヤはよく辛抱していた。相手が公爵だからか、それともドロシーの脅しが効いているのか。あるいは……。
「でも、なんでこんないっぱい竿があるんですか？」
　ついドロシーは聞いてしまった。
　カイヤの顔が面倒くさそうな表情になる――あら、まずかったでしょうか。
　代わりに答えてくれたのはナイアルだった。
「竿の種類が多いのは……折れたときのためと、魚の重さによって耐えられる竿は変わるからだな」
「いちばんでかいのが釣れれば充分だ」
「か、閣下！」
　はあ、とため息をついたのはナイアルだった。
「でも、折れたときのための替えは必要ですよ、公爵殿」
「む。う、うむ」
「餌は……クロディーンを釣るならシュラブとかクァサゴじゃなかったかな……。色々替えて試してみるつもりじゃ……」
「コエビとイソメもよくかかる」

ぼそっとカイヤがつけ足した。
「水の温度や流れの速さによって、魚のいる深さも変わる。どの竿のどの餌で、どの程度の深さに錘を沈めれば良いかは毎回ちがう。今日一日で釣るつもりなら、ひとつの竿で色々試している暇はない」
「おいおい。だからといって――」
ナイアルが理解したと頷きつつも絶句していた。
「――おまえひとりで、六竿も見張るつもりか！」
「いちおう、ひとりひと竿ずつ見てもらう。俺が引けと言ったら、竿を上げろ。後はなんとかする。いちばん右のふたつは俺が見る」
言われたことがドロシーの眠い頭に染み込むまで少しかかった。
「えっ……わ、わたしもやるんですかあ！」
「騒ぐな。魚が逃げる」
ぎろっと睨まれた。ひぇえ。今までいちばん、こ、怖い、かも。
ドロシーの怯えた顔を見てカイヤが気まずそうな顔になった。言い過ぎたと思ったのだろう。
「わたしが釣るんだ！　わたしだ！　いいか、ヌシを釣り上げて国中の評判を得るのは、このデュナン・フォン・アウスレーゼなのだ！」
「か、閣下！」

はあ、と今度はカイヤがため息だ。
「もちろん……です。釣りのもっとも大変なところは釣り上げるところ。魚の当たり――喰いついたところを引くなんて、それに比べれば前座のようなもの。釣り上げるのは公爵様です」
「そ、そうですとも、閣下！」
「む……そうなのか」
ナイアルが顔の前で手を左右に振りながらドロシーのほうに目配せをした。口が「嘘、嘘」と言っている。なるほど嘘なのか。きっと当たりに合わせて竿を引くのが肝心に違いない。
こうして船の側面に並んで、全員で釣り竿を見張る作業が始まった。
ドロシーもカメラの用意をしつつ、自分の前の竿から垂れた浮きを見守る。その一方で右隣りのカイヤもこっそりと見ていたのだが。
すぐに、ドロシーは釣りに対しての認識を改めることになった。

16

釣りというのはのんびり屋に向いているのだとドロシーは思っていた。
一日中釣り糸を垂れたまま、ぼうっと水面を睨む作業が続くとばかり。
だが――どうやらそれは間違いだったらしい。

カイヤはひと時もじっとしていることがなかった。
口を開いたりこそしないが、彼は六つの竿を絶えず見張っていた。しかもドロシーが思っていた以上に頻繁に、餌を替えたり、浮きの位置を調整して針を沈める位置を変えていた。六竿ぜんぶに対してだ。気長どころか、せっかちに見える。
むしろ公爵のほうがだらしなかった。竿を掴んだまま、すぐにぼうっとしてしまって、カイヤの「引け！」の声にも、しばしば遅れる始末だった。
合図があったときは、たいていは魚がかかっていたというのに。
カイヤは魚が実際にかかったかどうかわかるらしく、浮きが沈んだと思っても声をかけなかったときは竿を上げるだけ無駄に終わった。
時間がゆっくりと流れてゆく。
一時間が経った。
東の空の底のほうが徐々に赤みを帯びてきた。
闇が西へと追いやられてゆく。もう天頂付近まで白くなってきた。星がひとつまたひとつと消えてゆく。
カイヤは、小さな魚はそのまま逃がしてしまったし、それなりに大きくともクロディーンでなければ放してしまった。
八十リジュを越える大きさのクロディーンが何匹か釣れた。

それで満足してくれれば良かったのだが、公爵殿は気に入らないようで、文句ばかりが増えていった。だが、素人のドロシーにさえ判る。公爵ほどのヘボ釣り師は他にいない。間違いない。そのくせ、ポイントが悪い、餌が悪い、竿が悪いと文句ばかり。しまいに腹が減ったと大声でわめいた。
「フィリップ！　何か食べるものはないのか！」
「閣下……その……あいにく何も」
ドロシーたちだって何も食べてないのだ。けれどまさか、こんなに粘ることになるとは思わなかったし。
「魚ならあるけどな」
釣り上げたクロディーンのほうを見ながらナイアルが皮肉で言ったけれど、公爵はそんなものが食えるかと一蹴してしまった。
――ええっ？　食べないのにこれ以上釣る気なんですか……。
カイヤのこめかみが徐々に引きつってくるのが判って、ドロシーはハラハラしてしまう。
それでもカイヤは耐えた。
単調な繰り返しに思える作業を延々と休まずに続ける。川を睨みつけ、流れの下を泳ぐ魚の動きをなんとかしてつかもうとしていた。
汗がカイヤの額に滲んでいる。竿を上げては餌を替え、針を投げ入れる作業を、ひとりで、

しかも六竿分もやっているのだ。疲労も溜まるだろう。川面に投げるまなざしは揺れることなく真剣で、ドロシーはその横顔を写真に残せないのが残念だった。
この暗さではフラッシュが必要だ。でも、閃光を焚いたら魚がきっと逃げてしまう。
二時間を超えてしまった。そろそろ三時間になろうかというところ。暁の最初の光が東の彼方に走った。
「まだか。まだかまだか！　もう夜が明けるぞ！」
「辛抱ですよ、公爵様」
「何を言う。もう三時間も経つのだぞ！」
「どんな漁師だって、一晩で大物が釣れるとは限りません。そのときできることをやって、あとは幸運を待つしか……」
言いかけて、カイヤが口をつぐむ。
「ふん！　わしは一介の漁師ではない。釣りの天才なのだ！」
「……」
それきりカイヤは黙ってしまった。相変わらず川を睨み続けていたが、少し物思いに耽っているようにも見えた。その理由がなんとなくドロシーにも判るような……。
「ドロシー！」
ナイアルが叫んだ。

はっと我に返る。ほぼ同時に、カイヤが「引け！」と叫び、ドロシーは反射的に自分の前の竿を手にしていた。
浮きが一瞬で水面下に沈み、竿が見たこともないほど大きくしなった。
――こ、これは！
心臓がどきりと激しく鳴った。
「貸せ！」
横からカイヤがドロシーの竿に手を伸ばして掴んだ。
間一髪。
次の瞬間、竿がほとんど倒れるくらいまで引かれて、ドロシーはもう少しで船の外へと放り出されそうになる。慌てて胴を掴んでくれたのはナイアルだった。それでも竿をカイヤが掴んでくれていなかったら、先輩ごと川に落ちていただろう。
「くそっ！　こいつは……」
うめくようにカイヤが言う。
「セ、センパイ、くるし。あの……放してくださ……」
「うわっと！　わりぃ！」
ドロシーの胴に巻きついていたナイアルの腕が離れる。船の縁に掴まりながら、ようやく息をつき、自分の竿にかかった獲物を見ることができた。

しなる竿の先にピンと張った糸。その糸を、ちぎらんばかりに引いている魚の影が水の下にかすかに見える。
「大きい……」
「ありゃ百リジュはあるんじゃねえか」
漆黒の身体はクロディーンだ。だが、それまでに釣り上げたものよりも、ひとまわり、いやふたまわりは大きい。確かに百リジュはありそうだ。
そして引く力も段違いだった。
「くっ……。この、じゃじゃ馬め……」
竿の先が水面ぎりぎりまで下がっている。竿が折れないのが不思議なほど。
「やべえぞ、おい」
ナイアルがつぶやき、公爵の執事が「ああ！　船の下に！」と声を漏らした。
魚影がゆっくりと消えてゆく。船の下に潜り込もうとしているのだ。
このままだと竿が、
折れる！

17

「船を回すぞ！」
ナイアルが導力機関に飛びつきスイッチを入れた。かすかな震動とともに船を動かす導力が復活する。
「たの……む」
カイヤは声を出す余裕もないようだ。
ナイアルが船をほんのわずかずつ動かし舳を回転させてゆく。魚を船の真下から追い出しにかかった。その間もカイヤは竿を持つ手を緩めない。決して無理には引っ張ろうとせず、だが、魚に絶えず負荷をかけて弱らせていく。
船縁を掴むドロシーの手にもじわっと汗が滲む。心臓がどきどきと激しく鳴っていた。
――がんばれがんばれ！
あれだけ騒がしかった公爵も傍らの執事も息を呑んだままじっと見つめている。
じりじりと時が進む。魚との我慢比べだ。焦ったほうが負ける。だがカイヤは辛抱強かった。
この勝負に絶対勝つつもりなのだ。失った自信を取り戻すために。
「ああ。橋が！」
執事の声にドロシーは顔を上げる。
見れば、ナイアルによってじりじりと動かされていた船が、もう少しで橋にぶつかりそうな位置にまで来ていた。身体を伏せれば、マストのない船だ、ぶつかりはしないだろうが――。

「くそっ……逃がすか……」
「カイヤさん、橋が！」
ちらりとカイヤも視線を走らせる。さすがに顔が歪んだ。
――もうすこし……。もうすこしなのに！
船に乗っていた全員が思っていたに違いない。ああここまでか、と。
もう船が――ぶつかる。

そのとき、時計台の鐘がひとつだけ鳴った。
それが合図だったかのように、大橋が中央から割れる。
「橋が上がる……」
南と北に設置された巻き上げ機が巨大な円筒を回し始め、絡みついた鋼の鎖を巻きとってゆく。
立ち上がっていたらぶつかるはずだった橋が空へと開いてゆく。
頭上を覆っていた黒い影に亀裂が走り、白い色に染まっていた空へと向かって広がっていった。自分たちを閉じ込めていた箱の蓋が開いていくかのようだった。
「さあ……。そろそろ観念しろ……よ」
カイヤの声にドロシーは我に返った。水面に視線を戻す。魚の影が濃い。水面まで上がって

きたのだ。
鼻先が一瞬だけ水面に出た。丸い波紋が川面に幾重にもなって広がる。やった！　とドロシーが思った瞬間に、そいつは最後の抵抗をした。きびすを返し、ぐっと竿を引いて水底へ潜った！
はっとなって、一瞬、ドロシーは息が止まった。逃げられる！
だが、その動きをどうやらカイヤは読んでいたようだ。
「させる……か！」
ゆっくりとカイヤは竿を上げてゆく。
魚の影がふたたび見えてきて、水面に近づくにつれて流線型の体つきがはっきりとしてくる。
またもや鼻先が水の上に出た。そこでようやく魚は力尽きた。
釣り上げる最後の瞬間だけ、カイヤは竿を公爵に渡した。
「ゆっくり……ゆっくり上げてください。急にやると糸が切れます」
網を手に持ちながらカイヤが指示する。
「わ、判った」
「そうです、ゆっくり……」
水面上に魚の全身が出た。そこで一度だけ、びくっと魚が身体を曲げた。
「わ、わ、わわわ！」
「閣下！」



慌てて公爵の身体を抑えたのは執事のフィリップだ。そのおかげで公爵は転びはしなかったが、釣り上げた魚はぶらんこのように揺れて――。

音高く公爵の顔面にぶつかってきた。

「ふぎゃあ!」

びたん、とはっきり音がした。ドロシーは思わず顔をしかめてしまった。

――うわあ、痛いですよぅ……。

公爵は目を回してひっくり返った。

気づけば、船は橋を越えて川を遡っていた。朝日が昇っていて、通り過ぎた橋を照らしている。ドロシーは半ば無意識のうちにカメラを構え、シャッターを切っていた。フレームを覗いたとき、天に刺すように跳ねている橋の先ほどに、キラリと小さく何かが光ったのが見えた。あれは……。

南北に開き切った橋を、もういちどカメラで覗く。

まるで祝福の万歳をしているみたいだった。

――うれしそうです!

釣り上げたクロディーンは一〇三リジュ。

上がり切った橋を背景にして、魚を抱えた公爵の記念撮影をする。

魚がぶつかった顔面は真っ赤に腫れたままだったけれど。それでも満面の笑みを浮かべてクロディーンを抱えていた。
デュナン公爵は最後に一言だけ「見事だったぞ」とカイヤに言った。どうやらいばってばかりの人物でもないようだ。
——でも、たぶん、写真は没ですね……。
それでも目的を達したので良しとしようとドロシーは思う。なにしろ、いっぺんにふたつも問題が解決したのだ。さて、ナイアル先輩に言っておかなくては。

エピローグ

公爵と執事をホテルに届けてから、ドロシーの提案で、もう一度だけ船で橋に戻った。
ファインダー越しに覗いたときに見えた小さな光。
割れた橋の先に引っかかっていたそれは、ドロシーの予想した通り、ユミナが落としたペンダントだった。
「これを落としてしまって、ユミナさんはとっても悲しんでました」
そう伝えながら、降りてきた橋からナイアルに取ってもらったペンダントを渡す。
「ユミナが……」
「もう一度、あなたの手から渡してあげてくださいね」
カイヤが小さく頷いた。
ナイアル先輩が咳払いをひとつしてからカイヤに尋ねる。
「で、だ。どうよ。漁師はやめちまうのか?」
ゆっくりとカイヤは首を振った。
「いえ……。もう一度やり直します」
ドロシーも、ナイアルもほっと安堵の息をついた。
「まあ……そう言うだろうと思ったぜ。あれだけ嫌がってたわりに、本気で釣ろうとしてたからな。……何があった? 『見える』ようになったのか?」
解決したとはいえドロシーも気になっていたことではあった。
「いえ、まだ『見え』ませんけど……」
カイヤは船に積み込んでいた荷物の山から、布にくるまれた小さな包みをもってきた。ほどくと、お弁当箱が入っていた。
「今朝……ユミナが届けてくれたんです」
「えー! 朝って、だって……、あんなに早かったのに!?」
驚いてしまう。ドロシーがまぶたをこすっていた頃より遥かに早く起きただけでなく、お弁当まで作ったっていうのだろうか。

「俺……。今までずっと魚が『見える』のが当たり前で。それができなくなることがあるなんて思ったことがなくて……」
ぽつりぽつりとカイヤが語る。
「なんかショックで。このままだと、親父とかじいちゃんとかを追い越すなんて絶対無理だなって……。駄目だ勝てないとか、そんなことばかり考えてて。でも、あいつ——俺が魚を獲りに出るって、そう聞いただけで、こんなの作ってくれて」
「すごく喜んでいたでしょう?」
カイヤが頷いた。その顔を見てドロシーの心もほっこりと温かくなった。
「だから俺、今できることだけでもやろうって……」
よかった、とドロシーは心から思った。
「あー。待てよ」
何かに気づいたようにナイアルが首を傾げる。
「ってことは、公爵殿が腹が減ったとか言ってたときも、いちおう船の中に食べられるものはあったわけだよな?」
——そういえばそうだ。
「あいつにはこの弁当だけは食わせたくなかったんす」
カイヤがぶっきらぼうに言った。

頬が少しだけ赤くなっていたのは、朝焼けのせいだけではないだろう。
お弁当箱を開くと、メインはライスボールだった。六個も入っている。釣りをしながらでも片手で食べられるようにだという。中身が山菜なのは海の幸ばかりを食べさせられて飽きていたカイヤの好物だからだそうだ。
ナイアルもドロシーもひとつずつわけてもらった。
船を元の桟橋へと返すと、カイヤと別れた。
カイヤはこれからまっすぐにペンダントを渡しに行くという。手を振って去ってゆく姿を見ながら、ドロシーは小さくつぶやく。
「結局、わたしたちが何かする前に解決しちゃってたんですねー」
「いんや。おまえだって役に立ったさ」
珍しくナイアル先輩がそんなことを言った。
「そーでしょうか」
「証拠がある。だからこそ、おまえはちゃんと報酬をもらったろ?」
ライスボールを握る手つきをしながら言った。
——ああ!
「確かに……」
次期国王候補の公爵さえありつけなかったシロモノなのだし。

それで、ドロシーの心も晴れやかになった。すっかり日が昇ったルーアンの朝の空気と同じくらいに。

青い空を背景にした白い街並みがきらきらと輝いて見える。

※

ドロシーはナイアルの書いた記事を抱えて王都に戻った。

しばらくして、お忍びで旅行中の公爵が巨大な魚を釣り上げたとの記事が、リベール通信のささやかな埋め草として掲載された。扱いの小ささに公爵はあまり喜ばなかったらしいし、結局ドロシーの写した写真は没になったけれど。

その写真――大物の魚と、釣り上げた公爵の後ろに立つ若き天才漁師の姿を映した一葉を、ドロシーはルーアンの街のひとりの少女の元へと送った。

喜んでくれるだろう人のところへ。

彼女は、その一枚から背景の人物だけを切り抜いて、結婚するまでずっと枕元に飾っていたそうである……。



月刊 FALCOM MAGAZINE Vol. 152

発行人	田中一寿
発行協力	日本ファルコム株式会社
編集	小渕智幸 河野崇
デザイン・DTP	株式会社 ACQUA
表紙ロゴデザイン	荻窪裕司（デザインクロッパー）
発行	株式会社フィールドワイ 〒 101-0062 東京都千代田区神田駿河台3-1-9　日光ビル3F TEL 03-5282-2211（代表） http://www.field-y.co.jp/